



第2回NUFS&NUAS
読書コメント大賞
受賞作品



大賞

『きよしこ』重松清著

上手く喋れない。心の中ではこんなに
すらすら言葉が出るのに、と思う。まして
や吃音の主人公はどれほどの思いを抱
えて生きてきたのだろう。「吃音なんか
に挫けるな」とか「どもるのも個性のうちだ」
という悪気のない無神経な言葉が最も
心に重くのしかかった。少年が壁を乗り
越え、また違う少年に、この作品が書か
れたことを嬉しく思う。優しさと、強さと、
切なさが詰まった一冊。

(前川琴音)



最優秀賞

『旅のラゴス』筒井康隆著

ラゴスという男性が様々な場所で、様々
な身分で、女性に恋に落ち、旅をする
物語。集団テレポートや壁抜けなどの
ファンタジー要素を盛り込みながらも一
度読み始めると、ラゴスと共に旅をして
いる気分になり、ラゴスの生き方を通じ
て自分自身の生き方について考えさせ
られる一冊です。私は5回ほど読みまし
たが、その時の年齢や立場によって感
じ方が変わってくる面白い作品です。私
が生まれる前に書かれた作品なのに、
色褪せない魅力的な世界です。

(牛乳寒天)

図書館特別賞

『日日是好日』森下典子著

NUFSに入って、もっと英語が好きになっ
て、欧米の文化に取り憑かれるもの
だと思っていた。しかし、思いのほか外
国に目を向けず、いや外国に目を向け
るようになったからこそ、日本への愛着
心や日本人としての誇りを持つよう
になった私がいる。私には茶道の経験が
ないが、この本を読んで、主人公と共に
お茶を嗜んでいる気分になった。風の
においも、雨の音も、水の流れもすぐ近
くに感じた。”日日是好日”、今も昔も、
自然と共に毎日平和で楽しく生きようと
する日本の精神。私も常にこの精神を
忘れずにいたいと思った。

(はる)

出版会賞

『キッチン』吉本ばなな著

死んでしまう、というよりむしろ生きてしま
う。依存を超え、大切な存在を通り越し、
共に生きた人を失った主人公が頼るも
のは、大好きな食、台所。
普段、目に入りながら見ていない情景、
香り、暖かみ。
言葉を使うだけで、読む人の心を掴ん
で離さない。絶対に貴方を暖かくしてく
れる、日常の作品だ。

(鳥居秀人)

出版会賞

『「わかる」とはなにか』
長尾真著

生まれてから死ぬまでに、私達は「わかる」体験を幾度となく重ねる。でも「わかる」とは具体的にどのようなことなのだろうか？何を根拠として「わかる」と言えるのだろうか？本書を通じて、「わかる」までに起こりうる混乱や誤解、疑問が明かされる。読み終えた時、心から「わかった」と言えるだろう。

(Shiho.M)

奨励賞

『甲子園だけが高校野球ではない』
岩崎夏海監修

この本には、たとえ強豪校の甲子園出場校でなくとも、同じように3年間を野球に捧げた高校生たちの青春の実話が短編小説となって語られています。今年は甲子園第100回の記念となる年で、公立高校の金足農業高校が準優勝する「金足フィーバー」など、様々な世代の人々から注目を集めた年でした。しかし、甲子園という舞台に立てるのはほんの一握りの高校だけで、それ以外の場所でもドラマは生まれていることを多くの人に感じてもらいたいです。僕はこの本を読んで高校球児たちの偉大さを再認し、自分の野球人生に関わった人々へ感謝を抱き、そして野球がさらに大好きになりました。

(Ryo)

奨励賞

『暗幕のゲルニカ』
原田マハ著

『ゲルニカ』とは何か。何のために描かれたのか。そして誰のものなのか。『ゲルニカ』を通して、絵の持つメッセージ性や作者の想いを強く感じた。戦争が人々に与えた影響や凄惨さ、残された人々の悲愴感がひしひしと伝わってくる。教科書だけでは知ることのできない『ゲルニカ』の背景や当時の人々の状況や環境を知ることができる。絵画の知識がなくても本書の世界に飛び込むことができる作品だ。

(うーぱーるーぱー)

奨励賞

『吉原花魁日記: 光明に芽ぐむ日』
森光子著

大正時代、親の借金のため19歳で吉原に売られた光子が花魁「春駒」として過ごし、廓から脱出するまでの2年間の日々を綴った日記。「花魁」の華やかなイメージの裏には想像を絶する悲惨な現実があったことを知ることができる。今から100年前にも満たない時代にも公娼制度が存在し、女性たちが悲しい思いをしてきた。女性差別などが見直されつつある今、ぜひこの本を読んでみてほしい。

(かな)

奨励賞

『自分を変える習慣力』
三浦将著

何かを継続しようとして挫折し、自己嫌悪に陥る日々。そんな私にとって、この本との出会いは衝撃であった。「習慣化とは、意志の力を使う要素を少なくし、自動化するということ」、「潜在意識を味方につけた、意志の力に頼らない習慣化」。これ程までに魅力的で興味を引くフレーズがあるだろうか。今まで幾度となく悩んで来た「意志の弱さ」という前提を完璧に打ち崩してくれた。もはや革命である。なりたい自分に自分をデザインしていくために、何度でも読み返したい一冊になった。

(めぐみ)

奨励賞

『ハーモニー』
伊藤計劃著

健康は良く、病気は悪い。殆どの人間が同意する明確な差である。故に小説の社会は健康志向に人々を支配する力を結びつけることができた。皆が人を思いやり、誰もが健康を保つためテクノロジーの指示を受け入れる。そして画一化された人々による調和のとれた世界が完成する。これはフィクションなのだろうか。余命わずかな著者伊藤計劃が見た世界を我々は小説を通して目撃する。

(九重)



大賞

名古屋外国語大学創立30周年記念

『千の輝く太陽』
カーレド・ホッセイニ著

新幹線の中でこの本を読みながら涙が止まらなかった。この本は、アフガニスタンで実際にあった女性達の人生をもとに描かれた小説である。色々な苦しい出来事の中で彼女達が愛や友情を見つけだす話だ。過酷とされている社会に希望を見つけ出そうとする女性達の強さと、どのような逆境でも人を思いやる事の大切さに感銘を受けた。私と彼女達の生きている世界は全くことなっているが、この本のおかげで世界の不公平を深く考えさせられた。

(瀨崎仁和)

名古屋外国語大学創立30周年記念



特別賞

『ライラの冒険』
フィリップ・プルマン著

もし人を一目見るやいなや、その人の生き方や考え方が分かったとしたら、便利なのではないだろうか。もしみんなが自分の性格や私的欲望がよく分かったとしたら、どうだろう。ライラの世界の間にはダイモンという喋れる動物がいる。人間とダイモンは一心同体で、子供たちのダイモンは色々な姿で現れるが、大人になるとダイモンは人の心を表す形におちつく。あなたのダイモンはどんな動物なのだろうか。

(マヌーイロワ・アンナ)

奨励賞

『存在の耐えられない軽さ』
ミラン・クンデラ著

人生はどんなことである？この小説は存在的内容のある物語になり、数多くの問題を挙げる。筆者は人々は一度しか生きないに違いないため、人生を素描と比べ、私たちの決定は正しかったかどうか分ることができないという結論を出す。それでは、一度しかないことはあったことがないことと同じではないだろうかという質問をする。この論はものの本質について考えさせる。

(ズブコワ・エカテリーナ)

たくさんのご応募、ありがとうございました。

受賞者の皆さん、おめでとうございます。

これからも、とっておきの1冊に出会えることを願っています。